をめして勝光明院の寶藏にをさめられにけり、○略中長柄の橋の橋柱にて作りたる文臺は、俊惠法師が本よりつたはりて、後鳥羽院の御時も、御會などに取りいだされけり、一院○後鳥羽御會に、かの影の前にて、その文臺にて和歌披講せらるなど、いと興あることなり、

〔家長日記〕一歳三熊野詣の御悅に、長柄の御宿に著せ給ふ、○略中渡邊の橋の上に行かふ駒の足おと、おどろ〳〵しくふみならし、船呼ばふ聲々もかしましければ、御前の邊は何となくしめやかなるに、昔の長柄の橋とかやは、此渡なりけんかし、只名ばかりを聞わたるに、跡をだに見てしがなと思召たり、いづくを指てか見えんずべきなど、且は笑申合り、御前に少將雅經候が、其橋柱の切れは持て候者をと申す、京にて急ぎ參らすべき由仰あり、只朽たる木のはしに侍り、何計の去るしにかはさとも思召べきなど申合り、是は此渡りの住人瀧口盛房と申すをのこの傳へ持て侍りしなり、それが先祖に侍りけるもの、此川の邊をあやしき舟に乘てわたり侍りけるに、舟にこたへて舟俄に不動かへりければ、人を卸して水底を探らせけるに、堀出せるなり、細に見侍れば、中に黑鐵の心たて、柱のたゝずまひの姿なり、されば、よと思合せて、取て今に傳へたりけると申、京へ入らせ玉ひて二三日計ありて、此橋柱の切まゐらすとて添たる歌、

これぞこの昔長柄の橋柱君が爲とや朽のこりけん、返しせよと仰侍りしかば、

これまでも道ある御世の深き江に、殘もしるき橋柱哉、是を文臺にして和歌所に置かる、

〔住吉詣記足利義詮〕貞治三年卯月上旬のころ、津の國難波の浦みむとて、かの所にまうでけるに、淀より舟にのりて、○略中夜明もてゆくほどに、長柄といふ所につきぬ、いにしへは此所に橋ありて、人のゆきかよひしが、今ははしの跡とてはわづかにふるぐゐばかり也、まことや、ふるきためしに人のぴくめるはことはりにぞ、

くち果しながらの橋のながらへてけふに逢ぬる身ぞふりにける